慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	19世紀のイギリス文学と『源氏物語』の融合：『不言不語』の世界
Sub Title	Koyo, The tale of Genji, and Victorian literature
Author	堀, 啓子(Hori, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2018
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.114, (2018. 6) ,p.89 (140)- 96 (133)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2017年度藝文学会シンポジウム「物語の近代」 開催日: 2017年12月8日 場所: 慶應義塾大学三田キャンパス北館ホール
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01140001-0089

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

19世紀のイギリス文学と『源氏物語』の融合
――『不言不語』の世界

堀　啓子

ご紹介に与りました堀啓子と申します。本日は、河内先生、田坂先生が長い輝かしいご研究暦の一区切りで、ホッと一息おつきになる機会と承って参りました。高い所からで恐縮ではございますが、まずはお二人の先生に、ハッピーリタイアメントのお祝いを心より申し上げたく存じます。

オーディエンスの皆様には、河内先生、田坂先生のすばらしいご研究の精髄を拝聴なさる貴重な機会でございましょうが、お刺身にはツマがつきものでございます。皆様にはつなぎのお耳安めにと、私がはせ参じました次第、どうぞこの間は少しおくつろぎいただき、お過ごしいただければと存じます。

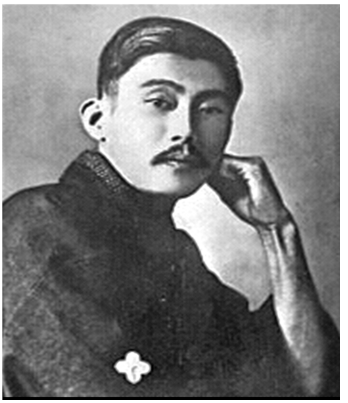
さて、本年は尾崎紅葉という作家の生誕 150 周年にあたります。日本の文学は長い歴史があるため、近代というと、通常　明治時代から大正、昭和の戦前までを指します。紅葉は今でこそさほど読まれないかも知れません。ただまぎれもなく明治の、近代日本文学を牽引した一人でありますし、そこに江戸戯作とは異なるかたちの新たな物語世界を形成していった立役者の一人です。この三田キャンパスにほど近い芝大門の生まれということもあり、本日は、尾崎紅葉とその作品に関連した物語の近代について述べさせて頂きたいと存じます。

なお、紅葉は 30 代半ばで早世しましたが、夏目漱石や正岡子規と同年の生まれで、わかりやすいのは彼らの満年齢が和暦の明治の年と一致していることです。すなわち明治 5 年に彼らは 5 歳、明治 20 年に二十歳となることを申し添えておきます。

さて紅葉は、ハンドアウト①（資料 1）にもお示しした通り、帝国大学予備門

①	尾崎紅葉（1867-1903）江戸、芝大門の生まれ。帝国大学中退。明治十八年、大学予備門在学中、学友らと硯友社を結成し、機関誌『我楽多文庫』を発行。二十二年『二人比丘尼色懺悔』が出世作となり、同年読売新聞社に入社。以後同紙に多くの作品を連載。代表作に『伽羅枕』『多情多恨』『不言不語』があり、『金色夜叉』は紅葉の病没により未完。泉鏡花、徳田秋聲、小栗風葉など多数の門弟も育成した。

資料１



資料２

資料３

時代に、仲間内で硯友社という日本近代最初の小説結社を結成します。総帥の紅葉（資料２）を初め、全員が秀才で、筆も立ち、ルックスも優れていましたので、彼らの学校の生き帰りには、往来で若い女性の花道ができたといわれたほどでした。どれほどの美男ぞろいであったかは、資料３をご覧くだされば一目瞭然かと思います。硯友社の初期メンバーで、○で囲ったのが紅葉、△が紅葉の親友で後に童話作家となった巖谷小波、□が川上眉山といいます。

そのあと、資料４の写真は残念ながら、紅葉の没後ですので、紅葉の写真はありませんがこの矢印が先ほど述べた川上眉山で、特に美形として名高く、森鷗外の『雁』に実名で登場したことはご記憶の方も多いかと存じます。彼らは、その文才とルックスを生かして文士劇なども上演し、その動向は新聞でも注目さ

れ、今でいうメディアミックスを体現していました。彼らの実人生が、近代的な物語を形成していたと言えるかもしれません。

資料 4

さて、尾崎紅葉と言えば、ご承知の通り大ヒットしたのが『金色夜叉』という作品です。紅葉は大学を中途にして『読売新聞』に入社し、生涯に発表した 70 作あまりの作品の多くを『読売新聞』紙上に、発表しました。明治 30 年から連載した『金色夜叉』の人気ぶりを、「若い娘もべっこう眼鏡の隠居も先を争って朝の読売新聞を耽読愛誦した」と、弟子の泉鏡花は表現しています。ですが、この成功に至る前に紅葉はある試作を行いました。その体験が『金色夜叉』という名作を生みださせることになりました。それは、19 世紀に活躍した、あるイギリスの作家の作品から構想のヒントを得るという試みでした。詳細を申し上げる前に当時の日本の文壇背景を少し整理させて頂きます。

紅葉の活躍した明治二、三十年代は、明治の文明開化に伴って移入された西洋文学の氾濫時期で、多くの西洋文学の翻訳や翻案があふれていきます。多大な影響を受けた日本の文士たちは、西洋の作品をうつすために、どのような文体がふさわしいかという試行錯誤を繰り返します。語彙についても卑近な例を申し上げれば、日本では従来三人称はすべて「彼」という言葉で表していたのですが、それでは英語の he と she の訳し分けが難しいために、三人称の女性を表す「彼女」という言葉も新たに考案されました。

大きな流れで申せば、言文一致体という、書き言葉と話し言葉を一致させた、より近代的な文体が成立していくことになります。その一方では江戸戯作からの脱却を図るため、物語の構想を如何に構成するかという問題が生じました。写実性を求めるいっぽうで、紅葉のような新聞連載作家ならば当然、意識していかなければいけないいわゆる大衆受けも無視できないファクターになっていきます。そのため文士たちは大別して二つの問題に直面したといえます。それは「文と想」です。

紅葉自身は、言文一致を確立した一人であり、ほかにも伝統的な雅文や雅俗折衷体などの文体も意のままに操り、その美文は「清纖豊麗、宛轉として盤上に玉を走らすが如き」と絶賛された人物で、その推敲には人一倍の心血を注いだとされておりますが、問題を二つに限定すれば、やはり「想」のほうが、やや覚束なかったと思われます。

『新潮』の作家研究座談会（「尾崎紅葉研究　作家座談会（九）」『新潮』昭和十年五月）において、中村武羅夫、徳田秋聲、千葉亀雄といった紅葉に近しい人々がこのように語っています。

> 中村。紅葉が非難されたのは内面的ぢやないといふことなんですか、さういふ批評は。
> 徳田。つまり想がないといふ。あの時分何かといふと想が想がと言ふんだ。
> 千葉。あの人が想が浮ばないといふことを自分でもすぐ言ふですね。

さらに続けて、千葉は「紅葉の手紙なんぞを見ても、どうも自分はこの頃は想が浮ばないで弱つてゐるといふやうなことがよく書いて居る。あれ程の人で、大作家といふ風になつてゐても、已むを得ず外国物をむやみに翻案してみたり、何だか斯う心細い所がある」と回想しています。そして「想」を得られないときの「スランプ」対策が「飜案とも何ともつかないものを出して間に合せ」ることだったとしています。

じっさい紅葉自身も、「私は人生がすべツたの轉んだの、と考へてかくことはない、其れで小説は一體かけるもんぢやないんだ（中略）私も不斷は世の中のことを考へて見ることなきにしもあらずだ、が趣向を立てるにあたツて、其なことは考へたことはない。」「不圖ヒントを得て、之れをかいて見たいと思ふことを大

略かき留めて置いて、新聞から催促がくると、其の古い書きとめてある趣向を取ツてかく。」（『唾玉集』明治三十九年）と述べており、「想」を、ストーリーラインのような「趣向」という材料的な問題として捉えていたと思われます。

その紅葉は、英語に堪能であったために、多くの外国小説を重訳も含めて英語の原書で読んでいました。そして弟子たちにも「外国語の読める者は、何も幼稚な頭から生み出した愚にも付かぬ事を並べて見るよりか、せつせと翻訳をして見るが可い、翻訳をすると、原書の思想も味へるし、且つ文章の稽古にもなつて、一挙両得だ」と教育していました。

紅葉は、イギリスのディケンズやシェークスピア、アメリカのアーヴィング、フランスのモリエール、ゾラ、モーパッサンを愛読し、ロシアのツルゲーネフやトルストイ、『アラビアン・ナイト』や『デカメロン』といった古典にも通じていました。ドイツのハウプトマンやズーダーマンなども網羅していたのは、最新の外国文学の情報や原書を持って出入りしていた高田早苗や上田敏、原抱一庵ら、一流の外国文学通に負うところが大きいと思われます。

『罪と罰』の翻訳者として名高い内田魯庵も、最初にドストエフスキーの名を知ったのは紅葉を介してであったと語っています。ただ紅葉は、ロシア文学だけは苦手であったらしく、魯庵はその様子を「人生本意の露西亞の小説はジメ〳〵して陰氣だと蔑（くさ）し、其頃からツルゲネフやトルストイを推奨した私を外道と呼び、私等の主張した人生の爲めの文學説をねちみやく哲學と嘲つてゐた」としています。魯庵はこれを、紅葉が芸術本意であったためにテイストに合わなかっのだと推察していますが、ひとつの背景としては紅葉の、文学における研究と実践は、彼が身を置く操觚界の中でも、新聞小説という特殊な状況にあったことが関わっていたと思われます。当時の新聞は、連載小説の魅力が売り上げ部数を左右すると言われ、各紙がしのぎを削るために抱える作家たちは、文字通りの常住戦場でした。

そのため、特に読者の興味を惹きつける面白い「想」、すなわち構想を何とかして獲得していくということは、紅葉のような立ち位置の文士には極めて重要な問題でした。その紅葉が明治二十八年に満を持して発表したのが『不言不語』という作品です。既に円熟期にあった紅葉ですが、これは従来にない独特の風合いで、読者を瞠目させました。簡単な梗概はハンドアウト⑨（資料 5）に載せましたが、あるお屋敷に奉公することになった環という若い女性が、優雅な主人夫妻

⑨　『不言不語 (いはずかたらず)』(『讀賣新聞』明治二十八年元旦から同年三月十二日)
梗概
　二十歳の環は、幼少期に両親を喪い、富裕な叔父夫妻に愛育されていたが、あるとき叔父が人に欺かれて財を失い、住み込み奉公に出る。奉公先は笠原という富豪で、若い奥方の話し相手を務めることで破格の給金が約束される。
　異様に暗鬱な屋敷に赴くと、美しい主夫妻は上品で親切だが、どこか秘密めいた影を感じさせる。環は、夫妻のためにその秘密を探ろうとするうちに、三年ぶりに帰宅した旦那様の弟・民之助と恋仲になる。以前はそうした秘密はなかったという民之助と協力し、彼らは秘密を探ろうとしていく…。

資料５

⑫　Charlotte Mary Brame (1836-1884) イギリスの女性作家。貴族社会やキリスト教精神をもとにした、劇的な展開をする恋愛小説を次々に発表、英米の若い女性読者を中心に熱狂的な支持を得た、一五〇〇作ともされる多作ぶりと絶大な人気から、伝説の作家と称された。
⑬　*Between Two Sins* イギリスの *The Family Herald* (Dec.9, 1882) 初出
名門貴族カルモア卿夫人のコンパニオン（話し相手）となった、十八歳のケイト・フォスターによる一人称語りの物語。優美な富豪の貴族夫妻の隠し持つ秘密を、壮麗だが陰鬱な館の中で、ケイトが探っていき驚愕の真実をつきとめていく。

資料６

と壮麗な屋敷に隠された秘密を探っていく、という一人称語りの物語です。環とこの屋敷の奥様という、若く美しい二人の女性が登場する艶やかな場面が多く、発表直後から大変な話題を呼んで〈読売の華〉と謳われました。

その『不言不語』は、このとき「雲の如き奇想と神の如き霊筆」の二点を大々的に広告され、やはり文と想とが二大アピールポイントとしてフィーチャーされていました。

さてこの執筆を支えるため、紅葉は座右に二冊の書を置きました。一冊は『源氏物語』です。実際にその「霊筆（ママ）」を支えるために、もともと美文家であった紅葉はさらに文体を磨くべく、予ねて読破していた『源氏物語』を執筆活動と並行して再読し始めます。その影響は顕著にあらわれ、当初から広く認められていました。じっさい、自筆の閲読日時が書き入れてある紅葉の手沢本の『源氏物語』を入手した村岡典嗣氏によってもその事実は検証されております。とりわけ紅葉は源氏の夕顔の巻を読んでいたために、一種の凄味を帯びた文体が、探偵小説風の内容とマッチし、ゴシック小説的な雰囲気を醸し出すことに成功しました。

いっぽう、紅葉が執筆の傍らに置いたもう一冊が、「雲のごとき奇想」のヒントを紅葉に与えました。この作品はヒロインが、暗鬱な館で貴族夫妻の秘密を探

るサスペンスで、イギリス人女流作家シャーロット・メアリー・ブレムによる、*Between Two Sins* というものでした（資料 6、ハンドアウト⑫⑬参照）。

紅葉はこの書を、アメリカの出版物として入手していたようです。それは、19 世紀末にアメリカで出版されておりました cheap editions と総称された廉価版小説でした。簡易な装丁で、紙の質もあまり上等ではなく、一冊が 10 ～ 30 セント程度と、他の小説に比べてけた違いに安いのですが、大衆受けを狙ってとにかく薄利多売を期して出版されたシリーズものです。著作権の処理や出版の管理は杜撰でしたが、とにかく多く売ればよいという目的で、日本にも多くもたらされ、紅葉を初め同時代の多くの文士が入手していました。

そうしたシリーズ本の中で特に人気のあったのが、このシャーロット・メアリー・ブレムです。彼女の作品は、恐らくは本人の了解を得ていないかたちでアメリカの出版社が大量に出版したところ、19 世紀末のイギリスの貴族社会の描写とカトリック教の博愛精神に満ちた作風が、読者の心を捉え、ソープオペラ的なストーリー展開とシンプルな文章が多くの読者を魅了しました。なお、この時に Bertha M. Clay という筆名で、それらの作品は広められました。

『不言不語』はこのブレムの *Between Two Sins* のストーリーラインを、ほぼなぞって書かれたものでした。とりわけ酷似していると思われる前半の一部をハンドアウトに両者の対照箇所として抜粋しました。そして前半のクライマックスは『不言不語』と比べてご覧いただければと存じます。

紅葉の『不言不語』は、ヴィクトリア朝のイギリス文学の怪奇性を、「もののあはれ」を現出する典雅な日本的な文体の魅力が包み込んだことで立ち現れた特異な作品世界でした。その融合が導いた日本の近代的な物語の一端について述べさせていただきましたが、さらに同様の手法で成立した『金色夜叉』などの作品は、後に韓国にも渡り、翻案されたものが現地でも大人気を誇ったということを申し添え、拙いご報告を終えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

⑮ 【陰鬱な屋敷】だが奉公先として初めて赴いた屋敷には、異様な暗さが漂っていた。

A 夕暮の暗さも、余所よりは一際哀に暗く、燈火の影も余所よりは光弱くて眠れる如く、寒威は戸外よりも身に浸みて、意地悪きまで耐へがたなし。此心地、譬はゞ、不祥の事ありて、涙に打湿りたる宿に在るが如きなり。［中略］不思議は此家に入ると斉しく、心傷ましく、悲しく、果敢なく、恐ろしく、寂しく。

B No ruddy light shone from the windows; all was dark and gloomy. It struck me vaguely, as I stood outside, that the house held a secret. In the large entrance-hall there were…only gloom and deep shadows. A small light glimmered somewhere in the depths of the hall. I felt chilled. …What a silent house this was! No sound disturbed it, not even the opening or shutting of a door; and the silence appeared to grow more and more intense. It seemed as though an atmosphere of wrongdoing filled the house.

⑯ 【秘密への興味】奉公先の家全体に満ちた雰囲気と、奇妙な主人夫婦は印象的であった。

A 枕に就きたれども頓には眠りかねたる心の中に、百端の事湧出で、解くは苦き糸の紊乱も、捉へむとする唯一筋は、御間の不和なる原因なり。之を知らでは、御奉公を為べきやう無し。まづ其秘密をこそ探らめ。［中略］初奉公の日は齢少きもの皆泣く。其身の心細く、生家の事のみ恋しうて、逃げても還らまほしう堪ふまじきものとはかねても聞き、然もあらむとは我も思ひ、宵のほどは実に獄などへ繋れたらむ心地もせしが、御二方に御目見申せしより、生家の事も、初奉公も身も忘れ果てゝ、この箇異き御不和の有様のみぞに心には懸りける。

B What manner of house, what manner of people were these? What was wrong under this roof? What was the shadow where all should have been bright? I had been tired before, but the mystery and novelty had so excited and bewildered me that I could not rest, I could not sleep.… I should have wept in sheer desperate pity for my own loneliness had it not been that my thoughts were so deeply engrossed with the mystery of Ullamere. I went to sleep at last, thinking of beautiful face of the wife, the noble face of the husband, wondering what shadow, what sorrow lay between them.

⑰ 【怪異の夜】奉公が始まった三月のある夜、夫人が奇妙なそぶりで起こしに来た。

A 仰せらるゝこと心得難く、惑へる面色にて御顔を瞶めてありけるに、彼方も同じく我顔を訝しげに視たまひて、其方には、あれ〳〵、あの赤子の啼声は聞えぬか、と声震して、怖しがり給ふ。幾度気を変へて耳を澄せども、赤子の声などは気も無し。さては夢をや見給ひて、未だ全く覚めさせ給はざるにやあらむと思ひければ、御心確に遊ばされよと申せば、益〳〵焦れ給ひて、其方こそ気をも心をも確にせよかし。寐惚れたるにやあらむ。あれ〳〵啼く、と仰せられて已まざりけり。

B “Have you sent it away?” she asked, in a hoarse whisper. “There is nothing to send away, Lady Culmore,” I replied. “Nothing!” she cried. “Are you quite sure? Nothing at all?” “No. What could there be outside your window?” I began to wonder if her brain was affected. It was the only possible explanation of her conduct. The wind had been silent for some few minutes. Then it rose again — the same faint sobbing round the window, a sound as natural as any could be, but evidently full of supernatural dread to her. She sprang her feet and held up her hand again. “Listen!” She cried. “It is nothig Lady Culmore,” I repeated. “Do you understand? It is only the wailing of the wind.” “Ah no!” she said. “That is what it sounds like to you. Do you know what it is like in reality? It is the crying of a little child, quite a little child, standing there. Hark! Do you not hear it now?”

資料７